思い出の子どもたち

岡田　実

日本人観光客が乗車しているバスは、ベネズエラの市内の大通りの、車の流れに流されているように見えた。渋滞し、進んだり停車したりしているが、少しずつ車の動きの全体は前進していた。観光バスに乗車していて、私は窓外の景観をぼんやり眺めていたが、ショックで緊張し、その光景に視線を集中させた。顔も、衣服も、足元も、埃にまみれて、シャツが破れている子もいた。そんな子どもの群れが、車の間隙を縫って、新聞、タバコ類を売っているのだ。それを買う客もいた。運転席の窓から新聞を入れ、その代償を受け取っている。少年たちの中に、年上の背の高い子がいて、童顔の子どもたちの動きに目を配り、危険な時は大声で何かを指示して、車の流れの中で自分もタバコを売っている。

曇天の日だったので、雲の薄いあたりの空から、鋭い日ざしが広がっていた。ベネズエラの大勢の子どもたちが、広い道路の危険な車道で働いている。子どもたちの中にまじって、女の子もいた。

コロンビアの子どもたちも、危険な車道でベネズエラの子どもたちと同じような仕事をして、働いていた。悲しそうではなく、明るい笑顔で嬉々として埃にまみれて、みんな元気であった。麻薬の国と言われているコロンビアで、子どもたちも危険な道路で、家計の足しに、と意識して労働しているのだ。

遊ぼうと、働こうと、子どもたちの意志に任せて、明るい心で子どもたちを見守っている親、親子の姿にそんな印象を受けた。ベトナムの子どもたちもそうであったが、貧しい環境の中で、子どもたちの心は、自由でやさしい大人に育っていくに違いない。

エルサルバドルの、両側はヤシ林の大通りの泥土をはねて、日本人の観光バスがゆっくり走って行く。浪費癖の第三夫人のために稼ぎを迫られて、ヘミングウェイは、「海と老人」を書いた。現地人のガイドのそんな説明を聴きながら、バスは博物館に向かっている。

この様な町にも立派なホテルがあった。そこには両親と一緒に旅をしている、純真さが輝くような瞳の子どもたちがいた。環境がリッチに一変したホテルの夜を、楽しむ幸せな笑顔で、静かに、男の子らと女の子らはたわむれていた。

レーニン広場まで、送ってくれるかのように、カムチャツキーのロシヤ人の子が、ついて来た。兄と弟のようであった。肩を組み、小声で何か話しながら、後ろを歩いてくる。色が白い肌、身なりも清潔で、可愛い子どもたちであった。広場が見えている、戦争記念碑の横で、兄のほうの子どもと、肩を組んで、ただなんとなく笑っていると、同行していた妻が、素早くカメラを向けた。言葉は解らなかったので、話はしなかったが、兄が不意に背後を振り向いたので、私もその方を見ると、赤ガワラの家があり、花が咲き乱れている庭で、胸から上を太陽にさらして、花いじりをしていたらしい、美しい女性が、起ちあがり、こちらに笑顔を見せた。この男の子の兄弟はあの母と、近くに住む外交員の子どもたちであろうと、推測していた。広場に待っている観光バスの前に集合する時間が迫っているようであった。私と妻はレーニン広場へ足を向けた。裕福な生活をしているらしい、ロシヤ人の兄弟の子どもは、品格があった。素直に育っている感じのいい子どもたちであった。町から広場までの道は、幅が狭く、汚れていた。レーニン広場の入口で、少年たちに別れを告げた。片手をあげ、ゆっくり左右に振り、笑って見せた。世界共通の、別れのゼスチャである。ロシヤ人の兄弟も、手を振り、すぐにうしろ姿を見せて、仲良く肩を組んで遠ざかって行った。

あれはどこの国の事であったのか、もう忘れて思い出せない。大きな市場の中で、色彩と形が目に浮かんでくる。その中で、十歳くらいの女の子に出会った。近くで両親が店を出しているのだろう。少女は一人で遊んでいた。肌が浅黒い、陽に焼けただけではなさそうだった。黒人のようだった。店の裏手の小さな広場に、フェンスの囲いがあり、そのそばの横に長い木製の椅子に、その少女と私は座った。いろいろと少女に質問されたが、何も答えられなかった。少女が嗤うと、歯が白い。

「ジャパニーズ」

少女は思いついたかのように、指の一本を私の方に伸ばして、嬉しそうに言った。

「イエース」

少女の肩を抱き寄せて、私は答えた。